夢想兵衛胡蝶物語後編

参

へ13
3845
8

門へ13
號3845
巻8

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之三

東都　曲亭馬琴戯編

哀傷郷

哀傷の徳の害るゝ。こゝ紙りて。関雎ハ哀そ傷らべとゝいゝ人多既よ情のゝ人多情あるとゝ紀ハ又哀傷るゝ紀とゝはゞ。むし杞梁ゞ妻ゞゝ哭く。塚崩ゞ城陥ゝ。處女ゞ哭声天ゝ通じて。雷電下ゞ発ゝとゝいゝ。ゝるゝと至誠の抵ゞとゝころ。申包胥ハ七日哭て。秦王終よ楚ゞ救ひ。烏賊律使主も七日哭て衣通姫を誘ゝ引ぬ現やらゝ哭りのも。時ゝ當て一藝の中るれべゝそ功もあるゞゝの雍門子ゞ哭上手。又楠公の蹄哭夫。今ゝ至て稱せる。さるゞゝ嗅子と持統天皇陽ゞぬりのとゝく歌骨髀の貞猥ゝゝ百笑べゝゝゝ。哭て娯ゝ紀夜もあるゞゝ笑ゝく強顔さと。高尾ゞいゝ。

涙よそゝ笑ひぞろく油斷のるらぬが浮世樂を盡く哀を求る哀去て
飲び來る飲べいを飲べば哀はとき來るせぶは只飲つゞ哀まゞ靜
天理よきこゝぶりの神仙とも老佛とも馬鹿とも利根ともいつるなん
ともく哀傷といふ國へ人をみ茶ろるよりひとゝべゝて哀む紙ゆて生平
とゝまゝべ五月雨の簷下癩病患の樋口ぐらゝくと洞落して暮さね
日もあぶざれば注良るを義人と稱し愁眉を上品と定め病映を愛ら
ぐゝ壓口かくを娯しぐるも忌赤子の啼声を嘗く命の長い經いとゝひや
幼少よろ子どもらよ鬢古さして哭とのを賀へるから衣類の勝ろ
袖ぐ彩を絞るもあくぬ血涙よ手掛を生ぐろ入ろ生ぐろいそげさ
草の板敷炎天ふ額の汗を拭ふ如く些立あぐゝ女中るんどへ板原上田の鼻紙
も拭ふ汗ぐ毎日く十帖あまろ費をあろ隣の女児ぐ哭鬢古ぢても

あの子のまへへくゝと情いとゝくんとろつがひるへとて詳をとる寒三日の
一天復ひ十九土用の砂糖湯も皆ゝ哭声を立てふぐ爲ぐ國もある
りの欲とゝを怪むりのいるけまと麦松兵衛へ紙老鴉の花ばま
まゝとちんぢも赤ゝの國へ巣をえて人ゝよつけ哭くよつけ直と呆く
るのぢろ閑へふも清へふも人さくゝ人まが目水ろれ抱ひろられば忽地ま
ろゝと哭出ゝて止所をもろれば一言まゝの問答もるゝばゝへ何あるま
かくのぢて年中哭て暮さろとやへよ凡ゝの國倍の性とゝて事ま觸く
ゝろゝろくて物をるゝひるゝをもるゝろ春の門松を冥土の旅の
一里塚とまゝく哀ゝぐ四方山ゝろ八重霞へ定めるれ秋の雲と變ろ
易きをゝひゝ咲も採へば毎樹の花も平散とれの雲を飲ゝ夏ろ
ゆへべの蚊遣火へ茶毘の煙と世を果敢ゝ山の狭外る秋の月終の友と

西を願ひ。冬終る庭の雪八人の命の消易きよりはこゝ會者定離と悟りてハ彩よ春来る鳥も。居すむ程ハ可哀けれど。秋の別れぶ悲しゝと。門を向上くるのもひ。哀別離苦と悟りてハ。天飛び秋の初雁も。後を先ぶろ世のるゝひ。いづれ弥よ入り中るぶ。いづれ雪ふ投ゝるゝと。やひるぶよ涙の種。彼処の嫁入りと見れの壻ぶ。ヤレめでたいといふものハ。彩婦ぶ姑ふるハ爰の間。松の翠の墨髪も。尾花ぶ赤の白髪と変じ。玉を敷く容顔も。張帝のゆふ工連。それハ齢よ之ゝらで。芸白髪のうゝるれがやひ諦る工もあるゝん。老女不定ハ世のるゝひ。亭主ぶ経命でも。門義ぶ夭折るゝれても。いづれ一方缺ねばるゝひ。ひんなとのゝるゝと。それの気の毒さ。今ぶややびば長いと。婚姻の真最中。哭て媒妁ぶ。外女ぶ。男姑。門兄弟ゝ。親族縁者。長屋中大約その中よりるゝりの大声あげて哭ぬハ臣。かくてぞ夫婦睦ゝ。彩ひよ長ひ岩田帯と共よ忽地乳を結ぶ。産ハ生死の境とゝ。十月ぶ間哭ゝ。又哭蓑ゝ。やゝふ嬢ゝる赤子の産声。オギヤアゝと笑ゝ。亭主多紙。又酸鼻を生るゝの。死るハ必定。この子の命ハ長いゝ。経いとやゝ。ちゝねども。逝れ速れ死孫ばるゝ。生まゝ紙。又ゝ死ぬ。をゝりへがかゝまで長いるゝハゝ。壁を沒ば。産婦も共よ。哽咽あげつゝ血暈発ゝ。上を下へとゝ。せども。穏婆いゝゝ。ゝ。今夜の祝儀の金一百疋を。握りつめて居ゝとこ。ゝ。ゝ。ゝ

ぜひも泣キ
あぁあぶ泣キ
むさう兵衛
ちゃてるみき
ちゃてるみき
ちゃてるみき

人の奴婢なるんども。見来の日ごとに生ごとの涙両を先へ流し。拾女和、
葬い初封面ごとに。後朝の涙を浜ぎ。人ごとに三度の膳よむくば。噎て頻
死いまやどもい欲。食傷いまやどもい欲と。箸を取るごとに胸ふさぐ。此
小子簡なるものは。春鋤て夏植つけ。秋ごとに冬く牧る米の一粒なりとも
化るくんや。農夫の身の膏で肥し低と大菩薩。今むざくとこぼ喝へ入ると
ごとば物体なくも。哀しうぞなると。嘆ごとに。食さくとこぼいるぜど。彩宅ひら
さ被衣ごとめるば客も亭主も屑ごとに鼻ぬ。この年未ごとがけて。
ゆく普請が成就ごとれど。義造ごやとてあるごとば。祝融舞馬の難
あんば。怨地烏有とのねぐ。ごとさるくとも百年と蠹朽ざる家はあら
ど。況て衣彩は忘る友よ。況て是ぬもとる。非如家なば生荒ごと
るい衣彩雑具が持ごとと。望も志ぬば命と。家庫が先へ滅る欲亭主

の命が先へ渇る欲。とともかくても。この世は假宅。造化の備屋。今ごとよ。
ごとその日をちひ日と。奈何哀しうあるまいぞ。況て至極く
結構なる家造りも。不如意なる日ごとば化人の有。又その人も一生涯住む
ごとに仮ごとら。阿房の餘煙も只三月崗岳鄙ごとく田園ごとる。果は
浅茅が草荒く虫の青だごとや残るらん。虫の青だごとや残るらんと。異
ふつまく小謡を。殺ごとものく愁ひ声。馳走の酒も喉へ入ごとまごとる
学者帝を親ごとる。一宿の記ごとも。水盃で遺言。なる日ごとば後ら
ぬ。ものごとひ定めて妻も子も。影膳居ごと注ごとに。年弱ごとの至情も。
あごとをごとれのごとめと哀ごと。子ごとも聞諍も生ごとをごとひなる。況ごとら
哭牛ごとい又富ものは富まごとふ。子孫相続の後ごとよ財の渇なんごとと哀しごと。
貧ごとのは貧ごとのは貧ごとよ。ごとはぬ不義理の生来ぬ先ごとく死ごとい。

哀めど人の送るさ物をば拾ハざ。送せ人の胸くすさ。そやあんかゝや
あらんとて。化の沈痛を病気ふ病ゝ涙を沃でゆ紀をぐるされバ貴きも賤き
も。賢きも不肖るも。老弱男女もしるぐて。常を記せぬのいるけま
ば。物争ひをさるエるく。國ま盗賊ゝ云て。只同病を相憐む実情を
りて交まべ。まるもゝぬも。我ゝ紀も。疎きもとくて憑ゝく世界ま稀
るる國るれど。情ゝいエふハ亭ゝいとも腹のゝろとともまくば。良賤喪ま
居るりめく如く。歌曲をあ奇ハど。絃管鳴ゝさば。慨水拉山ま生るりのなく。
明くも暮くも佛三昧口を啓ゝく笑ふりの絶く一人もあらざれバ。物ゝな
裏ふもらく。人気和せど。病ゐるゝぬりめるけまで。動もエれバ諸気
労咳を引ゆ。おのづゝら經命るゝ。夢想兵衛ハ。まつゝの秋勢を
見るふ。苦ゝ紀いべうもあゝば。悟るも浮世の人の憂を忘れ

て。おの紀エくゝてゝら紀もるふ喜ぶエるく。怒エるく。歩ものエ紀ゝで。かく
まで愛ま紀ゝて八經命るもエるゝ。説喻さづや。といく度ハ。ゝど人ゝる
ゝるめく。後べ夕方の晴間まつエく。哭止人もゞな。と素まども。彼首の隅でゝ。
ゝと哭ゝ。芒首の隅で八滅噫ゝ。と哭ゝまくゝ逆上せ。ゝらくゝふ
ふ白嫌ふふも。ゝるつく嶋の見紀顔を。蜂の蠆ゝる如くゝる見べ。ゝれも苦虫
咬ゝ潰ゝて。苦ゝ哭生ゝゝい紀持。かゝる亦ま長居せバ哭殺されふもゝれば。
足めとのあいうち。尻ま帆ゝけて走るふまゝべ。と涙川とうち渡ゝ。彼腸を
ゝる田越ゝて。胸板の驛路ゝゝ。悲歎坂へさゝかゝ。苛南志山るる慈日寺
ふ詣て。那瑰の南弥陀を拜ゝゝ。彼くもあくぬ神ゞ浦の浦の見るめも
酸鼻生湾鰈死湾鯨るんどゝふ魚の浪ゝうち揚ら紀ゝるもあゝ紀ゝま
ちゞゝくゝ。るる物毎ま気も滅入紀ゝば。只直ゝゝふまゝゝ。ゝくゝく。悲野

といふ。郊原ふぞ生ずうりう。この処ハ墓所ゝとゝ。古墳草ふ埋まゝ
白楊高く風ふ靡き。有馬皇子ゞ磐白松ハ。今も孀まゝあわれを送し。
真間の手児名の墳墓ハ紅涙枫を染めゝ。住鞆ふ仰ぐる覇王樹
寂く。棺槨とゝ朽ちゝ。檜の木口凄ゝ。巴峡ふ叫ぶ猿の声。堂
樹を把ふ鹿の鳴。いづまハ。ゝまゝ葛の紫。うらんゞれ。ゞ吞抓蓼ふ
いくゝる秋の蟋。雨ふ吟く冬の蜂。雉ふ子ゝ。小夜千鳥。冥土の
ふ声ゝとゝられ。ふ死出の山鴉。阿曾沼の鴛鴦。哀慕の泥ふ栖む。蛍野の雉。夜の鶴。ふ三重三の桐落葉ふ
三面風秋ゝ。朝露ふ濡ゝ感慨ふ。ゝゝやゝ鬼ふ変ゝ。ゝ
おゝまゝを化ふ。えゝゝ。ゝゝ流石の義経。ゝ入ゝ。ゝ
ふゝんゝゝ足進ゝ。ゝ顧ふ。天ゝ仰ぎて紙老

時ゝ待バ又生憎ふ。ゝ降りて実ゝハ。ゝ草葉ふ裂く虫の声。
いづまハ。ゝ入相の野寺の撞声。胸ふ巻て。ゝ難息ゝ。ゝ業
繋ぎ尾花ゝ袖のゝれ。ゝ振く。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
下ふ悲ふ。白く。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

かなべつる又何をいらん。まろハあるとども。屍風ハ敗るといくとども。骨ろの存ざど白骨ふるの霊あるべ。とぶ説とこ病を吹ひ。凡この國俗の性にて。哀傷をもて生平とするから。悲歎裏ふ逼りて。夭折するものおうるべられ。避延。この如く拉歴さるべ既ふ利害を説喩して。悲ひを醒さんところとども。歸哭の声巷ふ満て。とぶ言を聽ものは。さるべとろくちひーとをいで上るんも。腹のふくるる而ろるるべ。今つとるべ。沒ふ託ーく示さんとろ。説ところを聽用せよ。夫喜怒哀懼愛悪欲の七情ハ人の世の常ふして。生るく静るハ天乃性感じて動くハ性の慾。慾ある者ふ七情發る。いまぐ怒らべ憤らべ。直哀楽ふぐひとろ哀むものハあるべいふ。この人いくるとあり。哀ハ死別ろ。生別るまるものは。物哀ハ也又感るるかるるあるよいく悲めべ。陰を破ふ。ふく飲べ陽を破るとろ。飲べ陽を破るとろて。死を喪ふるものハ。悼めべる生を減

せるべ。喪ふ病あるとろ死ハ肉を辞せるべとるとるとめる。喪とハ忌服肉を腥とるるその生を保んを為るる。世俗妻くハ死の死さる。生の生さる。竹ハを刻ぶ。婦人の仁を仁とーく。往ーく君子の仁をもるべ。是有ふ悲歎裏ふ迫るべるべ。ーと滅まるすべ。まるべ。絞経くその死を求るものふるべ。痛べき深ひふるべ。生死ハ昼夜ふ異るべ。生人とさるるとるるるるる。死を憎めどもそのるひる。只生る日ハ生を楽く。死さるるハ死ーるるるるべ。吾生まるく五尺の形ある。是死ーて一棺の土となる。どれ土ーるるるといくども。物のあるるふるべ。只死ーるるとるるるる

哀をいたすべき事なれども。先王礼を製したまふ。これ敢て立てざるべからず。又子張が除喪の見系ふ。こと葬を予しらべ。拝樑しつこと歌ひ。先王礼を制したまへ。敢至らざるはあらじといへり。子夏曰子張曰孔子の弟子なり。いと有がる礼賢人なれども。哀をとりて礼をたてざる。夫天性の哀を。斉斬の情。饘粥の食を。礼に礼に哀を又礼に哀を忘ひ捨るほどの物を涙のろく。哀ばかりうら傷るへ。情あるべし。愚癡に彼狂ぶ物ふ。終日実と異なるべ。汝もしばや聖人へ。時ふ因て仕を安し。世に當つく。その業を。楽む者に哀傷は。形の主なり。神は仏の宝なり。形を労して。已ざれば。もるるから。嚬を。精を用ひて已ざれば。竭るふいとも速なり。只哀礼を悲まく。その情よりこれば。悼まて命を隕さる至らば。眼を病りのち空に華を見。天を憂るりのは。墮んとを懼るとい。譬喩にひとく。

でものらふ驚礼哀しまでりめる紙悼は。ある見愚病の所為ことより人見ようしらず。形は始より悩るりのふ。あらば又始ようる礼ふもあらば。有ふもあ。ふもあらぬ。こと名けて人間といふ。殤子を長壽とす。彭祖を夭折とことも。人の壽命は限りあり。天地の限りある礼ふ及ば。限りある命をもて。限りある礼りのと忘ひ一年三百六十日。間うち損めてうち歎き。こと。ふら命を縮んは愚といふもあり。病はこころ小人利を失へば。こと。と哀。士人は名の為ふ。こと。を哀。有司は祿の為ふ哀む。その歎き深しく。その哀を究るとれば。身をもて。こと。ふ殉ることを至れり。こと。ふ。哀傷の妻子は慾ふ生ざるを。こと。寡慾ふ。愛情うとくは。愚癡の哀傷。あるらんよ。世俗仏の宝をもらば。只彼雀の子をとびび龍の腮の珠。なんど。ふ。貨を貴びて仏の宝を失ふ。

哀傷郷の野

野を
さゝ
骨を
この
みの
ゝ
ゝ

むさゝ

列子天瑞篇曰。易変而為一。一変而為七。七変而為九。九究也。乃復変而為一云云

又憐べきことなるべし。人おのゝ稚きとき死ぬれば。壮のとき死ぬれば。壮
年まで及ぶとゝぢめ。いまゞ老後のるの紙もりはど。そへぬ者よ世もやもく。賢愚
も五十年。不肖なるも五十年。一生涯をあまたをまとるふその子の生る
と見えく。さて死んはは長き春の木杪の花とをく。ちりるん後をちひり。
東山より生る月を。やゝ西へ入る。終の友と祝べきと祝ぶべきを喜べざるん。
悟るふ似る遥ひるの。慈母けるべ等用あんぢ。されば一ハ二を生じ二ハ三
を生じ。三より万物をなぜれ。天地と天母とられと一ちあり。萬物られと見ず
るの。ひるが身ハ天地と共ふ生じて。ひるその一ちふぞまとどもその一ちをいふとれ
ハ。一ちと言と二とるるの又その言をいふとれハ。三とるぶといふとる。かゝるべ
ると見ひるが一ちより生じて。兄弟あり。妻子あり。子孫あり。親族あり。主君あり。
朋友あり。喜怒あり。哀楽あるとれハ。一ちより二三萬物を生ずるとまるべき

のとられ一ちふたゞまりて一ちふ絶るハ天理なり。豈凡夫私の胸算用りと
一生の動定を合ゝ知ん人の生るハ骨の如し。人の死るハ夜の如し。夜として
睡らぬ人もなし。熟く睡るべ我とまるべ。家をまるべ我ハ物もなく。天の一元よ
ゆるもあるべ。なるべら死人ふ異なるねど精神いまゞ滅せぬ狂ハ。陽ふ向ふ時
必ず笑とく。さてゞめて見ぶ身ある死まる。られるとる死まるるよ。喜怒哀楽を脱
まるゞ夜死して昏生る人の生死ハ昏夜ふあり。覚るとる死も睡るとく。我を
忘まるく。慈なるべ。天地と壽命を齊一せんふ。情慾のあるかるるさふ和神
の室を善ひ減らし。魂生くかくるぬと死なりとる。されば人
の死をさして長夜の睡とるまといひ屍を土中ふ埋る代。夜臺ふ入るともいふ
ぞ。ひとくるの理を悟るるのハ喜〳〵もあるべ。哀〳〵もあ。「汝髑髏也」
其あるべ。見ぶ說とるを遠忘せぞ。物ふ託し。義ふも入りて。この國信ふ告るる。

といひ捨て亦ゆく役ふ。日ハ七ツ半暮れ方なりよりぬりの月うげの阿弟
ちゃうを跡を求めて。義ふ未の雲ふ黄昏濡ら し。十町あまり走りつ。それば
ふりしる松の下ふ。二八だろうる義女年の。長丈なる猿の袂を。草草の
雲ふ引しあとや玉の如光る袴の折目正しく稜とりしるが義太兵衛を
見て。小腰を折め先生まづ慇ひのく只今示されし教訓の道理を
稱ひとぶふ。而も仕直ハ。回答せんとて結ぶ。といひうけて莞然とする。
笑顔藹藹てまづ此の國ふハ奇しと義太兵衛ハ此を見て。這奴を
融解のだけしるのらん。とやくど騒ぐ。案きるの徐ふ歩きとう。少年ハ
なる淺論あるりおのがひつるとふ悟ふ。ぶ為ら。ぶ為ら。といへバ
ふたゝび莞爾とうち笑ひ。かゝハ人迹絶しる野末ふ。ると跳ぜんいと侵ふ。
ちゞ宿ハ遠くも仕ぶ。卿ぶ。ぶ為き虫の声の外ふりのるれハ重蔭の夜

ハ殊さら冴けくとも。月を燭ふかゝり明さあ。誘ふ。とく先ふ立ハ義太
兵衛ハ。ちゞと走つ。その後方ふ跟ちそゆくとい。まぶ数百歩ふ至れ忽地
ふ黄昏を深ぶしる。林原の中ふ生垣結繞らしる。柴の戸あり。九
木の柱茅の檐僅ふ席六枚だりを布設て。調度と納る。襖戸といふりの
の外ふハ又物ありとも見えず。風爐ふハ炭を餘て。形のごく金ごけ物の茶
二三巻ちらぶしる。ふりふ木椿ひとりありて反古ふ裂て。ちゞ
ぶ油ふ黄ぶ。伽羅の香ちゞ。少年まづ裡ふ入りて。ちゞ。ふ
義太兵衛ハ。河源ふ使うけ。ちゞ。仙家ふ宿る。ちゞ。賓主の坐
定りて。ちゞ物をべいで。茶ちゞ主て出しる。主風流の生慣ちゞ月
ハ草ちゞ生く。新窠みさ入る。虫ハ庭ふ聚ちゞ。声賓を驚ちゞ。且
しゞ少年のちゞ。御ふ先生の高論をちゞと沙く。慷慨ふ堪ざハ。情の

る先主ハ死生の変を説のくとも死生の異なるとまうのハなど道家の訓を井じのくとも礼節の囹圄を跳り出るハなどさるふようて某ふ示さるく所なる生る人の上ふ〻て死〻ハ更ふその上ハ夫死なるものハ上ふ主君なく下ふ臣僕なく貧富貴賤の別なく長ふ老弱の序なく四時をまらず昏夜をまらず喜怒哀楽の情慾なけれどそのこゝろを万乗の天子ふもいなゝ〻ろ彼さのこゝろを楽むものハ真の楽ふあらず哀と哀むものも亦真の哀ふあらず至仁ハ親なく至悲ハ涙ハ昔聖王の制度せふ〻ぎ礼をもて首とせて人ふる情を鑒て天然ふ因らず夏なれども冷なれども其の節ふ対まうとて衣を更秋なれ暑けれどその節ふ対まうとて衣を襲喪ふ居の哀なるも四子果〻うとて〻ろふあるね笑顔をつくりつゝ世よ〻ちまぐり酒ふ宴の楽なるも法則を乱さんとなく意ふもあるね虚辞〻く。

盃をもてさあさ〻ら夫子の親なるもうちそなびく夫婦の睦〻なるもようそなびく礼節の極楷ふ繋まて〻く仁義の戦鬼とるるものハ人間のこゝろふ〻て死なれがくるる呵責なる〻まうまべこと又今さふふ何なる回巷伯ぞさふふぬいふまされども〻いざるとなれハ誰ふ亦このうとなるべさとまひまなど愁ふ假ふ形とおふ〻ふ伯〻まるふ先生ハいまゞ死後の楽とまうべ又この国の風俗とまうのハなどゝうら惑ひく化を笑ハべ人まうとれと笑ハそ〻ら伯〻ゆく南荒の陬ふハ人を食ハ国もあり西天の中ふハ教生せざる国もあり北狄ハ物のあハまとまうべ東海ハ君子ふ富り沈て日本の武烈支那の紂王の人と屠く楽とのひとる衛霊公の陽を車ふ乗せ鑑湖完の鶴を位を授なくるるんど例多くるとも覚えどされバふやいふ〻ハ賢者ハ境ふ入るとなれ国の大禁を問とくり〻まるれバ国俗の哀む所りて為

とするもの。あやしきことなれば。化國の人いこまとゝく。
只哭くことゝそゝめまどその哭中ふ樂をあり。喻てゆくば文藉人の生平ふ
悲言いんがごく。長いだらうで哭ふる。物ふ感じて哭ふ人情物是ら
ぬとて哭ふ情慈長ふ上を嬉ぶ。この國ふのを限りんや。或ふを者なん
どの。途ふ病卧て今臨終と者ふ。或ふ水没或ふ絞経枉死のもの道次
ふ仆ふ。とふ死ふ蛾のごく裹ひ。蠅の如く始ふ。こまを叙るもの跪きあくど。
ちうれごも真実ふ。これを憐ちく菜をとゝ臨終の正念とゝてめんとゝるもの
ふるく。叙るものゝちく尋くゝそいよく死ちるものふ益ひ。差夫逞くるゝ。
逝者ふ水の如く。貴賤老少いづくの浦で。何日何時のそれ死ふ没ふ。それ
ぬ浮世ふあるものゝら。化の枉死ふ驚くば。真実憐むべく。又ゝを自の得
とゝふもゝうゝさかくまでふ戯気くも。鬼こゝ死ふ物ふこの國ふ絶く仆らど。

これらふ人の長ことを身の乐をふまゝうふあゝばや。又かくまでふ仆ゝうどゝも。
凝情ふまでて長死とを樂ことゝる者ふ義大夫曲のあり是ゝる少ふも
泡ふまで胸苦ゝとく。鼻涙うちうゝて姉ゝぐ。物の本のあり是ゝる孝
子節婦のうくを似りて理り迫ゝられ條下ふ。母ゝうと泣ぬるのもひ。
その長ことを欲ぶ者ふ。あり是ゝる本ふ見科ゝとゝいどゝ。長ことを長く長む
ふ。これふ長ことゝるふ仆らば。彼ゝ長ことふ誘ゝ是ゝ感じて情の動くのを人ふ
天地の陶器ふく。假ふ人の形をゝのゝ。陶器ふ原未声ふるけ是ゝど。叩けば
玲瓏ゝるごく。人の性も又ゝちゝ。静ゝるゝ天性ゝる是ゝど物ふ叩きて。情慈
の音を發ゝ。喜びもゝ是ゝ怒ゝもゝ是ゝ。長ゝもすれ。樂ゝもすれ。一人の性ふ
七情ゝる死ゝ。茶碗ふ音のゝる死ゝ如し。そを是ゝとく可ゝるらんや。又ゝとて
可ゝるんやゝ。金石陶器ふ占ゝるゝとゝふ死ゝ。ゝ拝ゝる又声ゝる。声ゝる

て声を発する。是則物類相感玄理深微の至る。然れども是を論じがたし。難しとは解ぐ人の性ふ七情あるのけ是ど感ずる隨ふ七情あり。その理又悟ぐ。馬を指て馬もうの。琴と教て終ふ琴を知ぐるハ。髭蹄件くの摠名ふて琴ハ龍脣鳳足ふ件くの摠名ふる。ゆえ髭蹄とは蹄を回モ。是ハ斧鑿と件くふ。ゆえ馬と名づくべきものの。こハ龍脣。こハ鳳足。是ハ雲汀。是ハ蟹爪とゆ。これハ琴と名るものの。死ぬ。喜怒哀懼愛悪慾とゆけて。是ハ人の情とぞ。さものは。ちうとゆハ馬ふ馬ふる。具足ふ是ハ馬とる。琴ふ琴は。調ぶ是ハ琴ふとる。金石声ふ。叩けバ声あり。人ふ七情は感ぜ是ハ情発る。物ふ有ふ生ふ。人情ふ天性有ふ。道ふ入ぶ感じて動ふ。殊ふ女子ハ胸陜く。もりひ裏ふ迫

るもふ。ふ飲ふ。ふも長ふ。一倍涙ふ。ふれど。真ふ哀むふ。ふ。これハ前ふ。ふ。長ふ。ふ。ふ。

あへの十郎義国
廿郎ゑ弓

ばくべよ〜そうしても人のへ[illegible]。彼泡十郎兵衛といふものゝ忠義の為
ぎゝとて盗賊となる。非義非道の約ひして。金さのゝ[illegible]る天罰は終まそのの
罪ゝ脱まどこらぶ女児とも[illegible]して。金も多教を自業自得女児は可
愛そうなまと。親の因果が子に報ふ[illegible]〜出る清刀ゆうゆく[illegible]ていろゝ
つぬ設さんでめる母がうすい言ふ。盗賊杜騙とるゝ果〜も。因次の刀貪淺
の為。悪いたゝ義ふうゝん命。捨るいさらく厭いぬとゝ。あさい女の鼻の先主
の為ゝれがとく。盗賊〜ゝたゝ義とそゝ言語同断。夫婦ゝ公一ゝ[illegible]。盗
賊の悪名とそられ。古主の面へ泥を塗る。不忠の至り。苦〜しい
ことゝとそへば。虚も涙いこゝまねど。人情は理をこゝ祝ゝ[illegible]ゝ所のあれ
さふこゝゝと涙いこらでゝらいとゝいゝ推おてゝ浄瑠璃他者もさる
めゝるゝ。り〜理を推て論ゝるとゝれゝ。慾情ふ逆ゝりの不図盗ゝるも

あゝへゝが。たゝ義ふ凝ゝる丈夫がさ〜つまゝなるとゝ。一ゝを二ゝふゝけゝく。
ゝゝいとて盗ゝるゝゝゝ。又婆〜どの白婆〜どの。十ゝゝるゝやゝ〜ゝ孫女児
ふ。親の在所を索孫ゝとて大枚の金とりこせて。獨行とさゝゝゝゝ。石を抱う
ゝ。渕ふ臨ゝ。薪を負〜て火ふあゝれと。教ゝるふ異ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ釈ゝ
穀ゝゝゝゝ。胡麻の蠅ふゝゝけふれゝゝゝ助りがゝゝ命ゝゝ。彼婆〜
どの。ゝゝこのゝゝゝゝと。十郎兵衛が悪行ゝ。ゝゝ比ゝゝ女児が枉死も。苦〜
ゝいとゝゝのゝ。一幕涙こゝもゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ彼加孫重氏ゝ道刈黄ゝゝゝゝ不
了簡。名告ゝふゝゝゝゝゝ。名告ゝゝ物をゝゝゝゝ。石堂丸ゝ伝ゝゝ。
又見物ゝゝ袖彼〜ゝる。そのゝうゝゝゝ質屋庫ゝゝゝ草紙ゝゝゝ。ゝゝ戒
ゝゝゝゝゝゝ。彼戯ゝゝ泣ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ鬼ゝ実ゝゝ。実情ゝゝゝゝ
ゝゝゝ。この除名ゝゝる三の切も。大ゝゝ推てゝゝゝ道理ゝ稱ゝゝゝゝゝ

あへて脚をといふものその数尋くへるものもあれどとて世俗乃。耳へい遠くて解しがたく。ふたゝび三ゝび尋思して。ようやくその理をたどりつき。たゞめて感ずるこゝもあれど。目前を事一とする艶曲歌舞あへ。迂遠くて間ふ。あへぐ。ゑるところあてあへ。ぐらせ。吁と感じて泣のるいを。三の汐とゝく吹きた。世の人情いてらも。されば親を喪ふて。涙こぼさねものへるのけまど年を経る。中。情慾の忙しきとたへもりひ忘れ。向徒もあるもらん。生涯親を慕ふもの。こまを稱して孝子とふ。至孝ハ孝なり。誠忠ハ忠なり。孝なのぶ。て孝を。つし忠なのぶ。てたるものふ。こまを名づけて聖とふかれば強て孝行せん。そ年ふつさ狀さもか窮屈さを強て忠とつくさんとゝく。子を棄妻を賣りのハ。こる名聞の爲なまべ。至孝誠忠とふまどを。況て盗賊杜騙して忠義とふハ論あ及ばど。彼沙石集ふ載る法師が母の爲ふ禁

断所あて漁ヒとふ上とふ。例て非なる孝行とゝく。孟宗王祥が殺計へハ入まど。孝行を竭さんとて。勉てなるものふ。あらねば。只親の意を懐ば。身の宝とふものハ親ゝ外ふ亦なしと。ゝふ。誠を人稱して。孝行ものとふ。又たゞ死て孝をなる。こまゞ真の孝行なり。こまふうて推とゝへハ大ふ怒ゝ後ゝ。ものハ。ゞ怒ゝぬとゝ威勢あり。酷ゝ。歩哭ものハ。疾流ゝて悲をあし。おのまどゝ草紙物語ハ。おのまどゝの悲しいのと。書ぬ。餘情ふたゝ。されば素夫の泣上戸。弥生五月の出ゝ。西三清海せぬ奴婢ハ。則離別の情ふて。梅若の涙雨。帝ゞ洞の雨ふ如ゞ。唐山ふ。姬姬とふ義人あり。たゞの晋國へ。ゝとゝハ。涙襟を拓して。こゝち死べゝ悲しゝ。遂ふ晋王ふ。こまて。寵せられ。王と筐林を共ふして。合ふる山海の珎味をつゝ。孫。富貴その身ふ。あまりしゝ。その哭ゝる。涙。悔ゝ。これと

姬姬
又丽之
姬ふ似る
文封人
の子せ

雍門子八高誘カ云。雍門子名、周。善弾琴ヲ善ク哭ス。雍門、齊、西門也。居近之ニ因以為氏。哭猶歌也。見猶藏也。孟嘗君、齊相田文。芳埋云。雍門之哭、与泰音之誣相似。劉慎八劉孝標。

日本の曲子ハ離し。桃子生るとて。涙で生ずる。今ハ桃子の風も苦とハ
申さじ。哭ふこと。後の歌びハ。そのめの哀を忘れ。とれハ。その哀を八
哀ふあそび。後の哀ふ。そのめの歌びを忘れ。とれハ。その歌びも歌
ハあそび。かれば歌びも哀も。只そのとれハ隨ふりのみ。生涯の歌
とハ。生涯の哀をとるもの。さびくハのれりのくさも亦唐山ハ雍門
子とハふりのハ。夫をりてその名高ク。彼ハくその実をりて。孟嘗君
ハ見ぜず。既ハて辞を陳ね。意を通じ心を附声と發て歌哭ハければ。
孟嘗君これが為ハ。涙をハ流て禁めざく。ぜんをべをまぶざり。精神
内ハ形をく。哀を外ハ喻と。不倫の道とく弥重をれば。彼三の切をハ
とハふりの。みとの術をとくとれば。今ハもいそハ奇しくべ。又宋世祖皇帝
殊ハ寵愛をあひる餞貴妃とハふ美人の墓ハ。ふとせのふとあるるハ。

同宋書ニ曰。劉慎、字性元。性猛華。世祖所知。羊志宋書ニ曰。術人也。

世祖即秦郡の大守。劉慎字ハ徳願とハふりのハ宜人。卿等貴
妃ハ為ハよく哭て。哀を胃髓ハ徹るとあるべ。賞せと賞べ。劉徳願うけ
の刺史ハ。これをとるる。又その次ハ。志志とハふりのハ哭せまくべ。これも苦
ね。天上手ハく。鳴咽甚あるれば。禄下されぬ。そのちある人。志志
ハ問ふ。「辺ハ」ある術ありて。怠ハ涙を流しのひ。とうえ」と。頃れ
べ。羊志誉て。甚別ハ術あるハあそべ。去年牙まる」女房を。只一ヶ月ハ
ふハ生ず。さてとを涙を流しくれ。とるもるげハいくくとぞ。ふハ哉きよ
ハ。ハくれども。ハハ當て名誉とるれる。強て哀を好むとハふ。鹿を
鞭て笛を鳴せ。その鳴声を人ハ笑せく。涙とるをさせんとハふハかぞ。
拙き技ハ人法ぞ。假初のるるのとも。実ハ虚るくれば。人情

孔子家語 桓山四 鳥云

へいてくがしまれば羊志が貴妃ふ哭しへ。偽りふ仰されども。その俟を亡妻を。そく滅らう出るのり。俳優人の愁歎場の。上ゆへ愛ふ身を入れて。我を忘れて哀むあり。又見物も彼ぞ。直もその愁歎へ真の哀しみのぶといへども。憶をうとる不あらんその哀しみを欲べりの世間いづくの孟嘗君。又いづくの世祖あらんと。先生嘆じて曰く。ひが國俗ろ哭をのこうふ泣とて滅めのへ情よ疎き感へふ。彼稱子ろ。啼声を哭のへども。終日嘆て。嗑べども。嘆息ども。声おのづから生ふ任して。哀怒哀樂ふ因ふあらねば。注といへども和ぎあり。桓山四鳥の鳴よ比へて。陰婦がいつりの哭声をきうのひし。孔子のいへをとづねざる先生あへざるべきふ。ひが國俗の物ふ哭と稱児の嘆ふ如。と笑ふのへぬいふぞや。凡哀傷郷の人そして。物ぞふ涙りつく。祝へべき席をその哀しみ於べ

べきよりも哀むと。化國ふ反ふ風俗ふ是ども。毎日常を観ぞるの名。悪ふの況なさば。爭ひ甘ぞ。利をふぞひぞ。慈ふ感へぞ。ふるふ化國人へ情慈を慈ふ。ふ平ぶ級ゆふ。天と恨ふ人を咎め。いづくの罪を造ぞ。物を憐むうふく。怒をうふ世へ。あふ。ゆへ猜手の大懲言。息ひきるゆで終ふ怪ふべ。ふのうへふ陰あふ是べ。哀傷郷ふたるふ。されば勸善懲悪の為ふ。物の本を弧るりの。理義ふ仗り。因果を説き。物のあふ是を喩せべ。そ。ふの況りのまでも。その本然の吾をあへし。ふ是を見てふ。ふ熊を。此ふへ恥るりのもあふ。ふへ勸善懲悪の。捷径といふりのへ哀傷郷ふ。ふあふ。先生有笠紙鏡のくどいまぞ有。愛憐を脱ぞ。治く乱る況。忘是ざれば危く。治り安じて危きを。忘是ざれば苦ぞ。欲しくて哀きを。

忘れざれば哀しみ」がる者よ。有用をまるハ学用ふあり。まろ於よ人の貌
しるものの。解しるしとありといへども。その子こと是をよくかなしまば吐血卒中
喘ぐこと頻滅せんとする。又一家の主
たるもの。常ふ食する紙えて。妻子ハ是を飲づど。病とれよ食されば。碗をとるべくて是と飲ず。病篤て菜を求め。哀を乞ふ。ことばめて哭き。
飢て後よ食を借し。渇て後ふ大ふ飲を。熱て後ふ水を投。寒て後よ火を
与へ是べ。苦む所除きるべく。その者ハ死して。その益なし。是所謂。有用の
用ふして。抑亦遅しとやいふべく。孰行ものと。説つけられて養ふ
兵衛ハ席ふも堪ず忙しく。栄の戸を逃出て。足ふ信して三三町。走り退
つ。えて是べ。ありつる室ハ忽地うせく。天を仰ぐと明るまで。燈ふ火
を回して。そんかうえ是べ。浅ましやたゞの憩ひ。尾花が下の。触髏のほと
とふついかゝ。これなと怪しむ。わ。もあ是。紙老時ものふ降り来
つ。津ふ舟とこゝろ。ものち。無是べ閃と。升と虚空へのふる。

○總評

魚ふ網をおそれず。人をおそれ。人ハ虎の是を哀まず。物を哀
む。網ハ虎あるものゆゑ。故ふ魚と是をおそれど。物ハ己を益と思
有よ人と是を哀む。以あるゆゑ。魚ハ京ふる紙ものゆゑ。釜中よ捨べ。
人ハ命のそなるれをおりハで。六慾の働よ捨べ。物を哀むハ己の是
をかなしまべ。己を哀むハ。哀を忘るゝふ。まべ。物
を哀むときハ。何國ふ是哀傷郷なるべ。己を哀むと是
ハ。誰ふ是義想兵衛なるべ。よく哀を忘るものハ。喜怒も
なく。好慣ふ。既よ毒怒なく。好慣なるけ是べ。哀傷と名ふ国ふ。

哀傷といふ國ろのけものに。義兵衛が馬轎
より墮ちふしゐたてその痛をおぼえざるゆゑ。
又その命を隕すに至らざれば。我醒てこの書を批評して。解しがたきもの
あらばこれを有心よりさとれり。